# chojiai.jp

まさおさん、お父さん。

こうして皆さまと共に、お父さんにお別れを申し上げる日が来るとは、頭では分かっていても、胸のうちは追いついておりません。入院先で家族に見守られ、静かに歩みを止められたと聞いたとき、まずよぎったのは、工場の朝の空気のような凛とした気配と、約束の時間に必ず現れるお父さんの足音でした。遅れない人、言い訳をしない人、そして言葉より先に行動で示す人。その背中で、私たちは多くを教わりました。

お父さんは新潟県柏崎の生まれ。雪の重みや潮の匂いを知る土地で育ち、大学を終えると機械メーカーに入社し、研究開発一筋の道を選ばれました。課長、部長を務めるあいだも、ご自分の名刺より、現場の図面と工具の所在を気にするような人でした。環境対応の新機構で特許をいくつも形にされたことは、社内外の誇りでしたが、当の本人は飄々と「準備八割、本番二割」とだけ言って、若手の発表会ではいつも最前列で、少し照れた笑顔のまま、誰より長く拍手を送っていました。『技術は社会のためにある』。その信条は、お父さんの働き方だけでなく、生き方そのものであったと、いま改めて思います。

退職後、ふるさとへ戻られてからも、休むという言葉はお父さんの辞書にありませんでした。町工場の技術相談に足繁く通い、図面に指を走らせ、危ない手つきに気づけば「安全第一」と小さくつぶやいて、軍手をそっと差し出す。礼節を重んじ、公平で、無口で、でも時々、不意にこぼれるユーモアで周りを和ませる。そんな姿に、地域の皆さまも私たち家族も、どれほど背を押されたことでしょう。

私にとって忘れられないのは、小学生の夏休みの自由研究です。風車の羽根の角度を変えながら、台所の扇風機の前に並べて、深夜まで一緒に実験しました。回らないたびに私は肩を落としましたが、お父さんは懐中電灯で私のノートを照らし、黙ってペン先を指で整えてくれました。夜更け、何度目かの失敗のあと、ぽつりと「失敗の理由が分かったら成功だ」と言われました。叱るでも慰めるでもなく、ただ次の一歩を示す、その一言が、いまも私の中で回り続けています。あのときの懐中電灯の明かりは、お父さんの生き方そのものでした。

enojiai.jp であなただけの弔辞を作成

家庭では、妻の由紀子、長男の健、そして次男の私・涼、四人の孫たちに囲まれ、将棋盤を囲んだ夕べがありました。お父さんの趣味は多彩でした。釣りの支度は前夜のうちに完了、盆栽には季節の手入れを欠かさず、日本酒の利き酒では香りの向こうに土地の風景を語り、将棋は駒音より静かな間を教えてくれました。地元の少年将棋教室では、勝ち負けよりも「挨拶」と「片付け」の大切さを伝え、駒を並べ終えると必ず一礼。礼節は形から、そう教え続けた人でした。

お父さんの周りには、いつも湯気の立つ湯呑みがありました。難しい相談に来た人に対しても、まずはお茶を置き、話を最後まで聞き、「ここをこうすれば大丈夫だ」と短く、的確に。多くを語らず、必要な分だけを差し出す。その落ち着きが、どれほど人を安心させてきたか。困難に向き合うとき、私たちが最も恋しく思うのは、まさにその一言と、黙って差し出される温かいお茶です。

生涯現場主義のお父さんは、段取りで人を守る人でもありました。「準備八割、本番二割」。前日のチェックリストは几帳面で、作業靴はいつもきれいに磨かれていました。約束の時間を守ること、人に敬意を払うこと、安全を最優先にすること。その積み重ねが、お父さんの仕事を支え、家庭の空気もまた整えてくれました。

形見の懐中時計は、会社の仲間と家族の前で、最後に確かな音を刻みました。いつもポケットの奥で時間を教えてくれたその時計が、あの日、みんなの前で鳴らした音は、不思議と寂しさよりも、次に進む合図のように響きました。お父さんの遺志により、蔵書の技術書は研究室へ寄贈されます。ページに残る書き込みや、折られた角は、これから出会う若い人たちに、きっとまた新しい扉を開くでしょう。『技術は社会のためにある』という言葉と共に。

お父さん、私たちは、あなたの厳しさの奥にある温かさを、折にふれて受け取ってきました。冬の朝、玄関先で無言で差し出された手袋。試験前夜、机にそっと置かれた消しゴム。発表の朝、目の前で結ばれたネクタイの結び目。そのどれもが、声に出さない励ましでした。四人の孫に向けるまなざしも同じでした。一人ひとりの話を最後まで聞き、勝っても負けても「よく考えたな」とほほ笑む。背中で伝える人は、言葉こそ少なくても、記憶の中でいちばん雄弁です。

本日、ご会葬くださいました皆さまに、家族を代表して心より御礼申し上げます。生前に賜りましたご厚情に深く感謝申し上げるとともに、由紀子をはじめ家族一同、皆さまから

chojiai.jp であなただけの弔辞を作成

いただいたお気持ちを胸に、故人の足跡に恥じぬよう歩んでまいります。姉上にも、この長きにわたり変わらぬ支えをいただきましたこと、ここに感謝申し上げます。

お父さん。あなたが守ってきた段取りは、これからは私たちが守ります。約束の時間には、少し早めに集まりましょう。危ないと思ったら、ひとつ手を止めて、深呼吸をしましょう。迷いそうなときは、失敗の理由を一つずつ確かめてから進みましょう。そして、若い人の前では、最前列で拍手を送りましょう。あなたがしてきたように。

最後に、あの夏の風車の記録ノートは、今も本棚の奥にあります。傾きのメモ、風速の数字、その合間に滲んだ指の跡。ページをめくるたび、扇風機の前で二人並んだ夜の匂いが、ふっとよみがえります。お父さん、あなたの手の温もりと、静かな灯りは、これからも私たちの進む道を照らし続けます。

長いあいだ、本当にありがとうございました。お父さんの歩まれた道の確かさを胸に、私たちは前を向きます。どうか、どうか安らかにおやすみください。

息子・淳より、心からの感謝を込めて。

この弔辞は chojiai.jp
で作成されました。いくつかの質問に答えて、今すぐあなただけの弔辞を作成しましょうchojiai.jp

chojiai.jp であなただけの弔辞を作成